

地方自治体のトップは「政治家」である。このことが強く意識されたのは、二〇〇〇年の地方分権一括法施行の辺りからだ。国の機関委任事務が廃止され、自治体は名実ともに地方の政府として独自の政策運営を期待されている。

「今度の分権改革で初めて、首長は国の機関としての行政責任ではなく、まず政治主体である市民にたいする政治・行政責任をもつ『政治家』にならざるをえなくなりました」(故松下圭一氏、自治体の構想「自治」)

「政治家」に期待される資質とは何か。ビジョンを示し、住民や職員の共感を得ながら政策を前に進める「言葉」を持っているかどうかが大切な要素だと思う。

熊本地震から一年がたった。熊本、大分両県で二百五十二人が死亡し、いまま熊本県の約四万八千人が応急仮設住宅などで暮らす。

同県の蒲島郁夫知事は四月十四日の犠牲者追悼式で自責の念を語った。「熊本県には決して大きな地震は来ない」。そんな過信が、私の中にあつたのではないか。地震の起きたあの日から今に至るまで自らに問いかけない日はありません」

年頭の職員向け訓示では、震災と阿蘇山噴火、高病原性鳥インフルエンザ発生に見舞われた一六年を振り返り「三つの困難への対応を皆さんが立派にやり遂げたことを

言葉の首長

知事として誇りに思う。日本全体が三つの困難を乗り越えた県庁職員の皆さんを日本一だと思っている」と話した。

被災者と向き合い、職員を鼓舞する話し方は苦勞人ならでではだ。前職は東大法学部教授だが、自らを「落ちこぼれだった」という。

蒲島氏は一九四七年、熊本県旧稲田村に生まれた。家は貧しく、高校時代は授業をよくサボった。卒業後に入った自動車販売会社を一週間で辞め農協に転職。「牧場経営」を夢見て派米農業研修生プログラムに応募した。米国では過酷な農業実習をこなした。ネブラスカ大農学部での学科研修を契機に猛勉強し、豚の精子の保存法を研究して同大大学院へ。さらに政治家を志しハーバード大学院に進んだ。

波瀾万丈の半生は「逆境の中にこそ夢がある」(講談社)に詳しい。東大時代の蒲島氏と話したことがあるが、柔和でできさくな人だと感じた。県民に希望を示そうと懸命に発信しているのだろう。

道内では四月、高橋はるみ知事が四期目の折り返しを迎えた。支持率は過去最高の六八%(北海道新聞)。「目立った失策がない」ことが評価された。

道民に親しみやすいと見られる高橋知事だが「政治家」らしい言葉をあまり聞かない。重要テーマでは「国に要請する」と発

言し、議会や記者会見では事務方が用意した答弁から外れない。

「肉声」らしかったのは昨年末、鳥インフルエンザの発生の際。庁内会議で殺処分が遅れに「道民に対して、道の本気度が問われている」と強調した。本年度の職員訓示では職員の不祥事を受け「道政への信頼が一瞬で失われてしまう。緊張感を持ってほしい」と檄を飛ばした。

「失策が少ない」との評価は、自らへの批判に対する態度の高さのおかげかもしれない。知事の言葉に職員も引き締まっただろう。

蒲島氏の話に戻る。「週刊文春」四月六日号のエッセイスト阿川佐和子氏との対談で、蒲島氏は組織運営の信条を概略こう語った。

「私はいつも職員に『皿を割ることを恐れるな』と言ってるんです。最初に(県庁に)来たときは、保守的な組織で驚きました。だからこそ、トップが失敗してもいいといわなきゃいけない。組織ですから、一人では仕事はできない。私の考えを共有してもらうことが大事で、そのためには怒らず、褒めるようにしています。県庁全体がやる気になるようにするのが私の役目です」

住民の幸福という目標のために、どんな言葉を使うのか。彼我のトップの違いも興味深い。